



来年2月から 新しくなります。 図書館利用カード

中央図書館では、来年2月から本の貸し出しや返却などをコンピュータで処理できるようにするための準備を進めています。このため、今まで皆さんが使っていた図書貸出券はすべて新しくなります。2月からは、本を借りる際に随時発行しますが、事前に発行の手続きをするかたは12月3日(火)から中央図書館でお申し込みください。

申込方法
保険証、生徒手帳など本人だと確認できるものを持って、図書館にある用紙に記入してお申し込みください。

事前に手続きする場合、すぐにカードを発行できないことがあります。

問 中央図書館 ☎42 2525

第33回 大館市読書感想文 コンクール 入賞者発表

応募総数 一般の部: 6点 高校生の部: 17点
問 中央図書館 ☎42 - 2525

一般の部

優秀賞 土田 哲さん(旭ヶ丘)

三浦 房子さん(有浦5丁目)

佳作

石田 和子さん(通町)

達子 潤さん(部垂町)

高校生の部

最優秀賞

小坂 秋裕さん(大館高校2年)

優秀賞

小畑るり子さん(大館高校2年)

坂本 志穂さん(大館商業高校2年)

武藤 千穂さん(大館鳳鳴高校2年)

佳作

長谷部賀子さん(大館桂高校2年)

石田 夏妃さん(大館桂高校2年)

藤盛真奈美さん(大館鳳鳴高校1年)

成田 美宣さん(大館鳳鳴高校1年)

桐越 淑子さん(大館商業高校2年)

阿部 淳一さん(大館商業高校3年)

石戸むつみさん(大館商業高校1年)

「戦国時代」というと、或る一冊の本を思い起こします。『楽毅』これがその本の名前です。この本に触れて初めて歴史という分野のおもしろさを実感しました。

『楽毅』は全四巻という歴史巨編でしたが、長編が好きな私は、意気天を突く思いでページを開きました。私が私は歴史小説というものを甘く考えていたようです。『楽毅』は中国の戦国時代を背景とした小説で、当然の如く文章にはとても難しい意味の漢字や文字が並んでいました。だから楽しんでどころか、情けないことに辞書の助けでようやく少しずつ意味を理解して読み進めました。

その生身の人間が呼吸しているのです。その意味で彼ら一人一人が歴史の作者であると言っても過言ではないでしょう。楽毅も、主人公だからといって必ずしも良い結末を迎えるとは限らず、たとえそれがどんな悲劇であつたとしても、歴史の事実は誰にも曲げられず、そうして小説は常に史実のみを語るのです。一見、融通の効かない頑固者のようにも思えますが、それだからこそ作りものにはない現実と人間性があるのであり、これが小説を読むおもしろさの源になるのではないのでしょうか。

『楽毅』に魅了された理由の一つに、主人公楽毅自身の持つ人間的な魅力があります。楽毅は大器の将才を持ち、何度も趙軍を破っていきます。しかし、

託されます。燕王は父を「斉」に殺されており、仇討ちのためにはと賢者を求めていた所でした。そこに現れたのが楽毅だったのです。大望を託された楽毅は、斉攻略のために他国と同盟を結びますが、おもしろかったのはその同盟国でした。同盟を結んだ五カ国の中に、なんと趙も含まれていたのです。かつて祖国を滅した趙軍を楽毅が指揮する……、歴史のこの巧妙な運命には思わず興奮しました。楽毅はたった六ヶ月で斉の七十余城をも奪取し、燕王の復讐を成し遂げさせますが、それと時を同じくして燕王が亡くなります。斉に大勝利、楽毅の將軍としての人生はこれからという時に、その死は一抹の不安を投げかけるものでした。案の定、国内で名声高くなつた楽毅を疎ましく思う大臣は暗殺を画策、身の危険を感じた楽毅はかつての敵国趙に亡命していきます。そして、そこが

高校生の部 最優秀賞作品 『楽毅』を読んで 大館高校2年 小坂 秋裕

中山国は小国故に、戦国の七雄の『趙』から執拗な侵略を受けていたものでした。地図上で確認すればハッキリと解かるのですが、趙の国土は広大で、中山国のゆうに十倍以上もの領土を誇っています。絶対的に勝目がないのは火を見るより明らかで、事実中山国は敗北します。父の死後、国の存亡をかけて楽毅は戦いました。国のため、民のために戦い、しかし負けてしまつたのです。

物量の差はいかんともできず、国都が陥落するのですが、それでも楽毅は諦めませんでした。最後の決戦では兵力は約六百、その二十五倍もの敵数を前にしても臆することなく、小さな辺土を残すのみとなつた祖国のために戦います。私は次第にこの楽毅が好きになり、負けて欲しくない、と願いました。しかし、結果的に楽毅は負けてしまつたのです。中山国が滅亡し、思わず私もがっくりとしてしまいました。楽毅は諸国を転々とし、好機を待つしかありません。

歴史というものは実に不思議で、しかも巧妙で、おもしろいものです。祖国を滅した趙を指揮して斉を攻め、最後には趙の地に骨を埋める。まるで不可視の力、運命にでも導かれたような楽毅の人生は、今まで歴史小説にはさほど興味はなかつた私の中の何かを変えました。それは歴史の授業に対して意欲的になつたり、中国という広大な、そして悠久の歴史を持つ国への見識が広まつたりと、些々たることもかも知れませんが、非凡な人間に触れて、その背後に立つ歴史という壮観な視野が広まつたことは、自分自身の目指す高みへ近づき契機となり、一歩でも登れたのなら、これほど喜ばしいことはないと思っています。(原文のまま掲載)

中山国は小国故に、戦国の七雄の『趙』から執拗な侵略を受けていたものでした。地図上で確認すればハッキリと解かるのですが、趙の国土は広大で、中山国のゆうに十倍以上もの領土を誇っています。絶対的に勝目がないのは火を見るより明らかで、事実中山国は敗北します。父の死後、国の存亡をかけて楽毅は戦いました。国のため、民のために戦い、しかし負けてしまつたのです。

ここに私は、歴史小説のおもしろさを見ました。他のジャンルは、主人公の結末はすべて作者の考え一つに左右されますが、歴史小説ではそうはいきません。歴史を築いてきたのもまた人間、万人いれば万の思惑があり、物語があります。そこには作られた人物ではなく、今の私達と生きる時が違つた

小説がますますおもしろくなるのはここからでした。楽毅の将才を知る趙が、楽毅を味方に引き入れたいと言つのです。しかし楽毅はこれを断り、七雄の一国「燕」に行き、そこで大望を